

固有名詞の普通名詞化語彙小考

——随想風に、袖珍辞書風に——続

森 田 孟

本誌第189号（2005年1月）の本稿と同題^①の拙稿（pp. 55－30）は、思いの他厚意ある反響に恵まれて、中には、これは〇〇社か△△社あたりから文庫本や新書本では非出してもらえなどという激励（だと素直に受け取ることにしたが）まであった。少々異色の語彙集に筆者と同じような興味を抱く方々が少なくなかったのは幸いであった。別にそれで調子づいたわけでは毛頭ないが、筆者自身もう少し付加しておきたかったものがあの時でもなかったわけではないし、その後どうしても取り上げたい語彙も若干現れたので、もう一度だけ、これを限りにするが、あの続篇を本稿に収めることにした。文庫本云々は、筆者の本来の仕事ではないので、しかるべき方への示唆になるなら、それで十分である。

語彙の選択は、今回も前回と同じ方針で、主に英語圏のものであり、専ら筆者個人の恣意・好みによる。御海容を乞う。

実は人名や場所などの固有名詞に由来する語や固有名詞の付着している語彙は、本稿の「辞書」に挙げる性質のものではないものにも色々な分野に亘って少なくない。手許に集っているそれらは大雑把に十項目ばかりに〈分類〉してあるので、その極く僅かなものについての「随想」を、本来の「辞書」の露払いとしたい。

(1) 医学・医療関係。 病名、病原菌、術式、学説など、この分野に、発見者、考案者の学者、医師名の付いているものは夥しい。殆どがそうだと言っても過言ではない。～病（disease）[症候群（syndrome）、反応（reaction, phenomenon）、抗体（antibody）、ウィルス（virus）、検査（test）] 等々。知ったかぶりはしたくないし、術学めきたくないので、以下の項目についても、各々有名なものだけ若干ずつ極く簡単に触れるに留めよう。「**アルツハイマー病**」<1906年に発見して翌年報告したオーストリアの神経学者 Alois Alzheimer (1864－1915) の名から。「ハ

ンセン病」[1938^②] <癩菌の発見者・ノルウェーの医師 G. H. Hansen (1841-1912)。内耳疾患「**メニエール病** [症候群]」[1938] <フランスの医師 Prosper Ménière (1799-1862)。小児の難病として知られる急性熱性皮膚粘膜リンパ節症候群「**Kawasaki 病**」[1967] <小児科医川崎富作。“shigella”「シゲラ菌」、**“Shiga bacillus”**「志賀菌」[1918]、“shigellosis”「赤痢」[1944]、いずれも発見者志賀潔 (1870-1957) の名から。食中毒を引き起す「**サルモネラ菌**」“salmonella”[1900] は米国の獣医 Daniel E. Salmon (1850-1914) の名から。

人質が犯人に或る種の愛情を抱くようになることを「**ストックホルム症候群**」[1978] というが、これは1973年にスウェーデンの首都 Stockholm で起きた事件に因む。地名由来のものをもう一つ。小児咽喉潰瘍性水泡症や流行性胸膜痛などの原因となる「**コクサーキー・ウィルス**」[1949] は、この virus の発見地 New York 州 Cocksackie から。鎮静剤として用いる薬「**スコボラミン**」“scopolamine”はイタリアの博物学者 G.A.Scopoli (1723-88) の名に因む。もうきりがないのでやめるが最後に、面白いと言っては語弊があるものの、次の病名を挙げておこう。

“**syphilis**”「梅毒」[1530]。オウィディウス (Publius Ovidius Naso, 43B.C-A.D. 17?) の作品中の人物 Syphilus (『変身物語』*Metamorphoses* VI-231) に倣い、イタリアの医師・詩人 G.フランカストロ・ダ・ヴェローナ (Giovanni Francastoro da Verona, 1478-1553) が、瀆神の罰として最初に梅毒に罹った Syphilus を主人公として書いたラテン語詩 *Syphilis sive Morbus Gallicus* 「シフィリス [梅毒] 即ちフランス病」(1530) から。この詩人の造語なのである。

(2) 数学、物理学、生物学、化学、天文学、等の科学分野もきりががない。～定理 [原理、法則、モデル、実験、定数、常数、関数、予想、効果、器具、装置、等々] と発見者、提唱者、考案者、発明者等の付いた〈普通名詞化語〉は枚挙に暇がない。どれ程理科系に縁のない理科アレルギーの人にも、**ピタゴラスの定理、アルキメデスの原理、メンデルの法則、マグデブルクの半球、リーマン面 [球]、トリチェリーの真空、ボワソン分布、シュレディンガー方程式、湯川中間子 “Yukawa meson”** [1964]、など、20や30名前が口を突いて出てくるだろう。**キューリー、レントゲン、ワット (W)** などの単位も、温度計の**摂氏**も**華氏**も、皆、発見者・発明者の名がそのまま使われている。最後に一つだけ**ハレー彗**

星 (Halley's comet) について。これは75～76年の周期で現れる彗星で、1682年に英国の天文学者エドモンド・ハレー (Edmund Halley, 1656－1742)がその軌道を計算した。因に米国の作家マーク・トゥエイン (Mark Twain [本名, Samuel Langhorne Clemens] 1835－1910) は、この彗星の出現した年に生まれて次に現れた年に死んだ。その次にこの彗星が地球に最も近づいた年には、筆者自身も夢中になって凝視した。次回は2061年に現れるからもう私は見る事が出来ない。

(3)植物・動物・鉱物などの名称にも、その発見者やその品種を創り出した個人の名に由来するものが少なくない。

クチナシ (gardenia) [1760] <米国の医者 Alexander Garden (1730－91) / **セコイア** (sequoia) [1847] <北米先住民の指導者・チェロキー語 (Cherokee) 学者 Sequoya (c1770－1843) / **ダリア** (dahlia) [1804] <スウェーデンの植物学者 Anders Dahl (1789没) / **フジ** (wisteria) [1818] <米国の解剖学者 Casper Wistar (1761－1818) / **ペゴニア** [秋海棠] (begonia) [1751] <フランスのアマチュア植物学者で Santo Domingo 総督 Michel Bégon (1638－1710) / **マカダミア** (macadamia) [ナッツ nut] <オーストラリアの化学者 John Macadam (1865没) / **レンギョウ** (forsythia) <英国の園芸家 William Forsyth (1737－1804) / **ロベリア** (lobelia) [1739] <英国王 James I の侍医でフランドルの植物学者 Matthias de lobel (1538－1616)。

最後に一つ興味深いものを。下カリフォルニア半島産で“cirio”ともいうフォウキエリアの木で**ブージャムノキ** [観峰玉] (boojum tree) というのがある [1960－65]。これは、あの『不思議の国のアリス』の作者ルイス・キャロル (Lewis Carroll [本名は数学者 Charles Lutwidge Dodgson] 1832－98) が、その詩『スナーク狩り』 *The Hunting of the Snark* (1876) の中で創造した想像上の生き物 *boojum* (それを見た者は消えてしまうという) に因むもの。因みに「スナーク」も“snake” (蛇) と “shark” (鯊) とを合成してルイス・キャロルが創出した想像上の動物である。その後、米空軍の大陸間弾道弾 (ICBM) の名称にもされた。

動物、これも**トムソンガゼル**やヒタキツグミ (**Townsend's** solitaire) など実にきりがないので、均衡を失するが、一つだけ挙げておく。**モウコノウマ** (蒙古野馬)、**プジェワルスキーウマ** (Przewalski's horse) と

いうのがある。黄褐色の体色で前髪がなく、たてがみが直立している馬で、モンゴル南西の草原に棲息していたが、現在、野生での存在は確認されていないという。西洋人として最初にこの馬を観察した(1876)ロシアの探検家 Nikolai M. Przheval'skiĭ [ポーランド名 Przewalski] (1839－88) の名に由来する。

鉱物も手元には種々集まっているが、ここには、北米産の滑石 (talc) の一種でインク壺などを作る **レンセラー石** (rensselaerite) <米国の政治家・将軍 Stephen Van Rensselaer (1764－1839) と、**ジェイムソン鉱** [硫酸鉛鉱、毛鉱] ——鉛鉄及びアンチモンの複硫化物—— [1825] <スコットランドの科学者 Robert Jameson (1774－1854)、の二つだけ挙げるに留める。

(4)技術・処理・方法など。体操競技の鉄棒には、**シュタルダー**とか**トカチェフ**という華麗な技がある。初めて成功裡に公開した選手の名が、そのまま技の名称にされた。フィギュアスケートの**ビールマンスピン**に魅せられない人はいまい。サーフィンで、板上に背を丸めてしゃがみ両腕を前後に伸ばしてバランスを取るスタイルを**カジモド** (Quasimodo) というが、これはフランスの文豪 Victor Hugo(1802－85)の *Notre-Dame de Paris* (1831) の主人公の名に因む。

織物につやを出す**シュライナー加工** (Schreiner finish) [1904] <ドイツの織物製造業者 Ludwig Schreiner。発酵前か発酵中のブドウの果汁に砂糖を加えてワインの中のアルコール分を増す方法である「砂糖添加」(**Chaptalization**) [1891] <フランスの化学者 J.A.Chaptal (1832没)。宇宙飛行士やパイロットが急降下・急上昇の際に行う「耳ぬき」は**ヴァルサルヴァ法操作** (Valsalva [maneuver] [1972]) という。息を吸い込んだあと、口と鼻を閉じ、急に息を吐いて空気で耳管、中耳を膨らませる強制呼吸法である。イタリアの解剖学者でこの方法の発案者 Antonio M. Valsalva (1666－1723) の名に因む。

われわれが今も牛乳の消毒などでお陰を被っている低温殺菌法の**パスツール法** (Pasteurism) [1883] は、無論、狂犬病の予防ワクチンを完成させた(1885) Louis Pasteur (1822－95) の名から。石炭酸による防腐法である**リスター無菌手術法** [消毒法] (Listerism) [1880] も英国の外科学者でこの方法の考案者 Joseph Lister (1827－1912) に因む。この二つは、むしろ **(1)** に分類すべきかも知れない。

〔5〕〈物質〉としては二点だけ挙げておこう。まず**ニコチン** (nicotine) [1819] である。猛毒の液体アルカロイドで煙草に含まれているあれである。新大陸アメリカのタバコをフランスに紹介したといわれるポルトガル駐在フランス大使 Jacques Nicot (1530–1600) に因んでそのタバコには “nicotiana” [1600] なる名称がつけられたのでその中に含まれる物質が「ニコチン」になった。写真術で、露光過度のネガ画像の写真濃度を減じてコントラストを整えるために用いる溶液**ファーマーの減力液** (Farmer's reducer) は、英国の写真家 E. Howard Fermer (1860?–1944) に因む。

〔6〕〈現象〉にもその発見者の名前の付いているものが種々あるが一点だけ挙げておこう。**チェリーニの後光** (Cellini's halo)、もしくは**ハイリゲンシャイン** (heiligenschein [e] = saint's shining light [聖人の輝く光]) と呼ばれるものがある。「稲田の後光」などともいうが、特に露の多い芝生などで太陽光線の加減で頭の影の周りに白い光の輪が見える現象である。この効果について記述した Benvenuto Cellini (1500–71) に由来する。彼はイタリアの金工家・彫刻家で自叙伝で知られ、フランスの作曲家ベルリオーズ (Louis Hector Berlioz, 1803–69) がそれをオペラ化している。

〔7〕人体の部分。これには有名な**アキレス腱** (Achilles tendon) や**喉仏** (Adam's apple) は別にしても、解剖学者や病理学者の名の付いた部分が人体には多い。心臓組織にあってリウマチ心炎に関係のある**アショフ体** [結節] (Aschoff body) <ドイツの病理学者 Ludwig Aschoff (1866–1942)。大脳運動領に含まれる大脳運動連合領**エクスナー中核** (Exner's center) [1970] <オーストリアの生理学者 Siegmund Exner (1846–1926)。前立腺の下にある一対の小腺**カウパー腺** (Cowper's gland) [1738] <英国の解剖学者 William Cowper (1666–1709)。腎臓の尿細管の U 字形部**ヘンレ系蹄** (Henle's loop) [1885] <ドイツの病理学者 Friedrich G.J.Henle (1809–85)。もう一つ、脾臓の中であってインシュリンなどを分泌する内分泌細胞群**ランゲルハンス島** (Islet of Langerhans) [1869] <ドイツの病理学者 Paul Langerhans (1847–88)。

〔8〕製品、物、道具、機械、機器などには製作者、考案者、それを使った人、寄贈者、注文者などの名が付いているものが少なくない。銀板写真法の**ダゲレオタイプ** [1839] <フランスの画家・その発明者 Louis

Jacques Mandé Daguerre (1789–1851)、**エッフェル塔** (La Tour Eiffel) [1889] <Alexandre Gustave Eiffel (1832–1923) など幾らでもある。断頭台の**ギロチン** (guillotine) [1789] は、処刑時の苦痛を軽くするためこの道具の使用を提案したフランスの医師 Joseph Ignace Guillotin (1738–1814) に因む。17世紀に用いられた重い細身の剣は、**パッペンハイマー剣** (pappenheimer) というがこれは30年戦争でドイツ軍を指揮した Gottfried Heinrich Graf zu Pappenheimer (1594–1632) に因む。**サン(ド)ウィッチ** (sandwich) [1762] は元来は地名で、英国 kent 州東部の港町だが、第4代サン(ド)ウィッチ伯爵 John Montagu (1718–92) が、食事中に中断されずに賭勝負を続けられるようにとこれを考案し、或る日などは一日中こればかり食べたと伝えられる。そこから「サンドウィッチ状に挟む」意の動詞が生じ、「二区間に跨る」とか「二つのもので前後を挟む」意の形容詞状の語として Sandwich man [board, bar, beam, boy, compound, structure] などと使えるようになった。他にも色々面白い例は沢山あるが全て割愛する。

(9)**法律、政策、条約**などに提案者、実施者、締結された場所の固有名詞が付いたものが多い。**ポーツマス条約、ポツダム宣言、ワイマール憲法、ドーズ案**等々。仕事の出来高に比例して特別奨励金を支払う賃金制度を**ビドー給与制** (Bedaux system) というが、これはこの制度を創始した米国の実業家 Charles Eugène Bedaux (1887–1944) の名に因む。**ホールデーンの原則** (Haldane principle) とは、国公立の研究機関は関連の行政官庁から完全に分離、独立して研究活動を行えるという研究の自由の原則のこと [1966]。英国の生理学者・遺伝学者 John Burdon Sanderson Haldane (1892–1964) に由来する。

(10)**地名、場所**。発見者や、初めてそこに到達した人や造った人、あるいは時の為政者、指導者の名が付くものが多い。**フラミニア街道、マゼラン海峡**等々これまた枚挙に暇がないが若干挙げておこう。

米国 Wyoming 州中部の都市で石油基地の**キャスパー** (Casper) は、幌馬車隊の危機を救おうとして先住民に殺された Caspar Collins の名に因む。現在の綴りは地図上の誤記に依る。Nevada 州 Virginia 市近郊の金銀鉱脈**カムストック鉱脈** (Comstock Lode) は、1857年に2人の男によって発見されたが、1859年にその先有権を得た Henry T. P. Comstock (1820–70) の名に因む。Mark Twain (1835–1910) が『へこたれるも

んか』 *Roughing It* (1872) で、19世紀末には廃鉱となったこの鉱脈の盛時の模様を活写した。ミシシッピー河最初の鉄道橋架設地 (1856) である、Iowa 州東部の都市ダavenport (Davenport) は、この地で活躍した毛皮商人 G.Davenport (1783–1845) の名から。首相官邸を初めとする官庁が並ぶロンドンの官庁街**ダウニング街** (Downing Street) は、この地域に地所を所有していたアイルランド生まれの英国の外交官 Sir George Downing (1623–84) に因む。

露払いが長すぎた憾みがあるので、急いで続篇の「辞書」に移ろう。

＊

[ア 行]

アキレスの踵 (Achilles heel, heel of Achilles とも) 「(唯一の) 弱点、急所」「(弁慶の) 泣き所」[1810]。トロイ戦争の英雄アキレウスに因む。彼が生まれた時、母は彼を不死身にするため Styx 河に浸したが支えていた母の手のせいで踵の部分だけが水に浸らなかった。彼はトロイ戦争でここを敵将パリスに射られて致命傷を受けた。[GM] ③

アジェラスティ (agelastie) 「嫌笑症^{*}」[2005]。ラブレー (François Robelais, c1494–1553) が、パンタグリュエル物語『第四之書』に付した「シャチーヨン枢機卿オデ狎下に奉る書」に「…何人もの人喰^{カンニバル}人や厭^{ミザントロープ}人^{アジェラスト}族や苦虫族どもの、私に対する讒罵があまり非道で理不尽でございましたために、私の忍耐力も打ち負かされてしまい、もはや筆を執ってほんのちょっぴりでも物を書く気はなくなっていたのでございました。」(渡辺一夫訳) とある。ラブレー自身、この「アジェラスト」(agelastes) について「笑うこと絶えてなく、物悲しくて、無愛想なの義」(同) と解説している。「アジェラスティ」はこの「アジェラスト」から、チェコ出身のフランス語作家・批評家ミラン・クンデラ (Milan Kundera, 1929–) が三冊目の評論集 *Le Rideau : essai en sept parties* (Gallimard, 2005) 『カーテン——7部構成のエッセー』の中で、〈笑い〉を許し難い悪と見做す性向を指して創出した造語。(邦訳書は「エッセー」が「小説論」となって集英社刊。pp. 213–14参照)。＊この評論集の訳者、西永良成の訳語。

尚、英国18世紀の作家ロレンス・スターン (Laurence Sterne, 1713

ー68) の、世界文学史上でも屈指の奇書にして名作『紳士トリストラム・シャンディの生涯と意見』*The Life and Opinions of Tristram Shandy Gentleman* (1759-67) には、アジェラストース (Agelastes) がこの本の悪口を言っている、として使われているークンデラの指摘に依る (cf. 第3巻第20章、The Worlds Classic 版 p. 173)。

ラブレーの新造語と考えられる (渡辺一夫) カンニバル、ミザントロップ、アジェラストの前二者はフランス語として生き残った [英語にもなる] が、最後のものはそのまま消えた。にも拘らず、200余年後にスターンによって一まず復活されたが、英語としても認められなかった。しかしクンデラの新造語が広く用いられるようになれば、それと共に “agelastes” も、英・仏語として認定される日が到来するかもしれない。

アナバシス (anabasis) 「進軍、遠征」「進行、進展」 [1706]。ペルシャのキューロス (Cyrus, the younger, 424?-401 B.C.) が兄のアルタクセルクス (Artaxerxes II) に向けた討伐遠征軍に加わったギリシャの将軍・歴史家クセノフォン (Xenophon, 434?-355? B.C.) は、不利な戦いとなってキューロスが戦死後、自ら軍を指揮して難関を突破し、有名な「一万人の退却」に成功した。その事情を叙述した彼の史書 *Anabasis* [ギリシャ語で “going up” の意] に由来する。anabasis and slump 「進展と不振、一進一退」

アルタバン (Artaban) 「高慢な男」。セヴィニエ夫人やラ・フォンテーヌも愛読したという17世紀のフランスの小説家ラ・カルプルネード (La Calprenède, Gautier de Costes de, c1610-63) の『クレオパトラ』*Cléopâtre* (全12巻、1647-58) の主人公の名から。「アルタバンのように高慢な」「ひどく気位が高い」 “être fier comme Artaban” なる言い回しが生じた。セリーヌ (Louis-Ferdinand Céline, 1894-1961) の『城から城』*D'un château l'autre* (1957) の書き出しから7パラグラフ目で「で、一体どこに住んでいるの、高慢なアルタバンさん？」 “Mais où demeurez-vous ? ... demanderez-vous ... fier Artaban ? ” と使われている。(Céline, *Romans II*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 7.)

アングルのヴァイオリン (violon d'Ingres) 「(芸術家の) 余技、(一般人の) 芸術上の技芸・特技」。フランスの画家で新古典主義の巨匠アングル (Jean Auguste Dominique Ingres, 1780-1867) が玄人はだしのヴァイオリン奏者であったことから。

エディソン (Edison) 「発明家」。米国の発明王エディソン (Thomas Alva Edison, 1847－1931) から。

エディプス・コンプレックス (Oedipus complex) 「父に代って母と性的関係を結ぼうとする無意識の欲望から生ずる観念の複合体」「息子が母親に、娘が父親になつく素質」[1895]。ウィーンの神経学者・精神科医フロイト (Sigmund Freud, 1856－1939) の心理学で異性の親に対して子供が無意識に抱く性的願望。特に息子の母親に対する欲望を意味し、父親を競争者として憎むようになり、母親に性的な思慕を抱くというもの。オイディプス (Oedipus) は、テーバイ (Thebes) の王で、ラーイオス (Laius) とイオカステ (Jocasta) との子。誕生時に予言されたとおり知らずに父を殺し母を妻としたが、後に真相を知って自ら盲目となり、放浪のうちに死んだ。[GM]

エレクトラ・コンプレックス (Electra complex) 「娘が父親に対して無意識のうちに抱く愛着と母親への憎悪感」[1913]。アガ멤ノン (Agamemnon) とクリュタイムネーストラ (Clytemnestra) との娘エレクトラ (Electra) は、弟オ레스テース (Orestes) を唆して母とその情夫アイギストス (Aegisthus) を殺させ、父の仇を討った。[GM]。前項「エディプス・コンプレックス」と共に精神分析 (Psychoanalysis) の用語。極く簡略に無くもがなの説明をした。広義の“Freudianism”は“Marxism”と共に世界の文学・文化の領域にも深甚なる影響を及ぼしている。

[カ 行]

ガイ (guy) 「男、あいつ、やつ (fellow)」[1806]。1605年に英国国会議事堂を爆破しようとした火薬陰謀事件の首謀者の一人ガイ・フォークス (Guy Fawkes, 1570－1606) の名に因む。彼の人形を作って引き回し焼き棄てる祭りが、彼の逮捕を祝う記念日 (11月5日) に行われることが始まり、やがて Guy が「奇妙な風体の男」から、単に「男、やつ」を意味するようになった。

カッサンドラ (Cassandra) 「凶事の予言者、世に入れられない予言者」。トロイア王プリアモス (Priam) とヘクバ (Hecuba) の娘。トロイアの滅亡という真実の予言をしたがアポロン (Apollo) に呪われて、

誰にも信じられないようにされた。その陥落後アガメムノーンの奴隷となり、彼と共にその後クリュタイムネーストラーに殺された。[GM]

騎乗の人 (man on horseback) 「国家の危機に救い主として現れ独裁権力を握る、あるいは、握ろうとする軍指導者。独裁者 (dictator)、特に軍人独裁者」。フランスの狂信的愛国者・扇動政治家ブーランジェ (Georges Ernest Jean Marie Boulanger, 1837–91) 将軍の異名から。彼は陸軍大臣となり (1886)、軍制改革や対独強硬策で人気を高め、第三共和政不満分子を指導した。

クサンチッペ (Xanthippe [zæntípi]) 「口やかましい妻、むら気な [癪持ちの] 妻、悪妻、がみがみ女」[1596]。口やかましく悪妻の典型とされているソークラテース (Socrates, 469?–399_{B.C.}) の妻から。

グログ酒 (grog) 「水で割ったりキュール類 (特にラム酒)」／「(酒樽の酒気を抜くために) <酒樽に> 熱湯を注ぐ [に浸す]」[動詞]。[1768]。1740年、部下にストレートの酒類を禁ずる代りに、割って薄めた飲み物を飲ませるように命令した英国海軍司令官 E. Vernon (1684–1769) の異名 *Old Grog* より。

コッカー (Cocker) 「正確さと正直の基準」の代名詞 [1756]。正確な内容で知られる『算術』*Arithmetic* (1678) の著者である英国の算術教師エドワード・コッカー (Edward Cocker, 1631–75) に因む。“according to Cocker [Hoyle, Gunter]” 「正確 [厳密] に言えば、厳密な規則や計算に従って、規則 [定石] どおりに、正しく公正に」。代りに用いられるホイルは Edmond Hoyle (1672–1769) で英国のトランプ遊戯の権威者。「ホイスト」whist (ブリッジの初期の形式) の規則を作った。ガンターは Edmund Gunter (1581–1626) で英国の数学者、計算尺の発明者。

コペルニクスの〈転回〉 (Copernican <revolution>) 「画期的な、革命的な、甚だ重大な、徹底した、天地をひっくり返す」[形容詞] <転回> [1677]。地動説を提唱したポーランドの天文学者コペルニクス (Nicolaus Copernicus [Mikolaj Kopernik], 1473–1543) に因む。

ゴルゴン (gorgon) 「恐ろしい女、醜婦」[1398以前]。怪物の三姉妹 ステンノ (Stheno)、エウリュアレ (Euryale)、メドゥーサ (Medusa) の各人を指すが、これに因む。頭髮は蛇で、翼と真鍮の爪を持ち、見る者を石に変えた。[GM]

ゴルディオスの結び目 (Gordian knot) 「難問、難題、至難事」[1579]。フリギア (Phrygia) の王 Gordius の戦車は極めて複雑な結び方で轅を輓に繋いであり、アジアを支配する者のみがこれを解くという神託があったが Alexander 大王はこれを剣で両断した。この故事に因る。“cut the Gordian knot” 「難題を一刀両断に解く、快刀乱麻を断つ」。cf. 拙稿「〈ゴルディオス〉の結び目と〈快刀乱麻〉」『筑波大学新聞』No.133.(1991年5月17日)。

ゴンゴリズム (Gongorism) 「形式と内容に関する規範無視、ラテン語風散文や新語の導入、古典の引用と奇抜な譬喩による難解な表現などを特徴とする華麗で凝った詩を書いたスペインの詩人ゴンゴラ (Gongora y Argote, Luis de, 1561–1627) 風の文体」[1813]。

[サ 行]

サディズム (sadism) 「加 [嗜] 虐趣味、加虐性愛、残酷好き、極度の残酷」[1888]。精神医学・精神分析の用語。相手に苦痛を与えることによって満足を得ようとする性倒錯。多くのスキャンダルにより生涯の3分の1を獄中で過ごしたフランスの作家・思想家サド (Donatien Alphonse François, marquis de sade, 1740–1814) の著作から生じた語。

サドマゾヒズム (somasochism) 「加虐被虐性愛」[1935]。精神医学・精神分析の用語。同一人物内、あるいは、対人関係の中に相互存立を見せる加虐、被虐の両性愛傾向。→「マゾヒズム」

ジム・クロウ (Jim Crow [時に j- c-]) 「黒人差別 (政策)」 「[侮蔑・不快]黒人、黒ん坊」/「黒人差別の」「黒人専用の」[形容詞]/「(黒人を) 差別する」[動詞]。[c1832]。黒人に扮した白人によるショー (minstrel show) で Thomas Rice (1808–60) が歌った歌の名から。“Jim-Crow”[時に j-c-] 「黒人差別政策を支持する」「黒人専用の」[形容詞] “Jim Crowism” 「人種隔離政策(への支持)」[1835]。“Jim Crow law” 「(州法中の) 黒人差別法」[1895]。

ジョウ・ミラー (Joe Miller) 「笑話集、滑稽本」「言い古された冗談、古臭い洒落 (chestnut)」[1789]。英国の著述家ジョン・モトリー John Mottley (1692–1750) 作の滑稽小話集 *Joe Miller's Jestbook* (1739) より。この表題はロンドンの劇場ドルアリー・レイン (Drury Lane [Tudor 王朝時代 <1485–1603> から Drury 家の大邸宅があった町の名に由来

する])の有名な喜劇俳優 Joseph Miller (1684–1738) の名に因むもの。

ジョンソン流の (Johnsonian) 「大袈裟な言い回しやラテン語系の語を多用した文体 (Johnsonese) の」 [形容詞] [1791]。最初の学問的な英語辞書 *A Dictionary of the English Language* (1747–55) の編纂者・批評家・詩人サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson “Dr. Johnson”, 1709–84) に因む。尚、“Johnsonian”は名詞でもある。「サミュエル・ジョンソンの模倣者」「大袈裟な文体を使う人」「荘重な文章を書く人」「サミュエル・ジョンソン研究家」。

ジョン・ハンコック (John Hancock) (米話) 「自筆の署名、サイン」 [1846]。米国の政治家・独立宣言の最初の署名者で、その署名が肉太で読みやすかった John Hancock (1737–93) に由来する。彼は1780年にはマサチューセッツ州初代知事に選ばれ、信望が厚かった。

ジョン・ブル (John Bull) 「英国 (民)」 「典型的な英国人」 [1712]。スコットランドの諷刺作家・医師で Anne 女王の主治医であったアーバスノット (John Arbuthnot, 1667–1735) 作の寓話 *The History of John Bull* (1712) の主人公の名から、代表的な英国人を表すこのニックネームが生じた。

スアードの愚行 (Seward's Folly) 「その時は稀代の愚行と看做されるものの、その実先見の明に富む測り知れない価値ある行為」* 1867年10月18日にアラスカ領はロシアから米国に正式に譲渡されたが、この、720万ドルでの「アラスカ購入」 (Alaska Purchase) を敢行した当時の国務長官 William Henry Seward (1801–72) によるアラスカ買収は、この広大な (日本の4倍余、合衆国第2の州である Texas の2.2倍弱) 寒冷地が無価値な土地と見做されたためにこう称され、スアードは嘲笑的になった。

だが翌年から油田が見つかり、金鉱が発見され、地下資源の豊富な土地と判明し、極美の自然景観に恵まれたこの州 (に昇格したのは1959年1月3日。1912年に準州にして以来47年間放置していたこの地の戦略上の価値に米国政府が目覚めたからである) の現在の愛称は、“Great Land” 「偉大な土地」である。州北西端のベーリング海峡 (発見者であるデンマークの航海者 Vitus Bering [1680–1741] の名に因む) を挟んでアラスカは、ロシア領と3 km 以下の間隔で向き合っている。もしアラスカがロシア領のままだったら、おそらく今日の米国は有り得なかったと断言

しても差支えなからう。スアードは大変な〈愚行〉を犯したわけだ。その〈愚行〉を愛でられてであろう、現在ベーリング海峡に突き出た土地は「スアード半島」(Seward Peninsula)と名づけられている。尚、州の名は、スアードが今のアラスカ半島を指す先住民のアレウト語(Aleut)の地名“alakshak”「アラクシャク」から採ったとされる。

＊辞書にはないこの語義は、本稿の筆者が与えたものである。その切なる思いを、読者諸賢よ御明察あれ。

ストレインジラヴ博士(Dr. Strangelove)「(特に軍部、政府のタカ派で核戦力の行使を主張する)核戦争狂」。単に“Strangelove”とも。米国のキューブリック(Stanley Kubrick, 1928-)監督による同名の映画(1963)の登場人物名より。

[タ 行]

ダモンとピュティアス(Damon and Pythias)「無二の親友、信義に厚い友人、刎頸の友」。紀元前4世紀のシシリーはシュラクーサイ(Syrakusai, [英語]Syracuse)でのこと、僭主ディオニシオス(Dionysius the Elder, 430-367B.C.)王に謀反した廉でピュティアス(伝説ではこうなっているが、実はピンティアス [Phintius] が正しい、というのが定説)は死刑を宣告されるが、彼が家事整理のために故郷の家に帰れるようにと、ダモンは自ら進んで人質となった。遂にそのまま約束の期限の日が来る。ダモンは泰然として身代わりに処刑台に上ってゆく。とその時、余儀ない理由で思わぬ時間がかかったことを陳謝しながらピュティアスが息せき切って駆け戻ってきた。ダモンはピュティアスを最後まで寸毫も疑わなかったし、後者も前者を裏切ることなど瞬時といえど思いもしなかったのだ。ラ・ロシュフコー公爵(La Rochefoucauld, François, duc de, 1613-80)の箴言84番に曰く、「友を疑うのは友に欺かれるよりも恥ずかしいことだ」“Il est plus honteux de se défier de ses amis que d'en être trompé.” (La Rochefoucauld, *Réflexions ou Sentences et Maximes morales et Réflexions diverses*, Champion Classiques, 2005, p.145.)。

王はこの二人の信義の厚さに感じ入って罪を許した。この故事から“Damon and Pythias friendship”「ダモンとピュティアスの友情」なる成句が生まれた。正に「刎頸の交わり」(cf. 司馬遷『史記』「廉頗藺相

如列伝第21)であり、「管鮑の交わり」(cf. 同「管晏列伝2」)である。

同種の友情の典型としては他に、ダヴィデとヨナタン (David and Jonathan) [サミュエル記上18: 1、同下1: 25、27]、ピューラデースとオレステース (Pylades and Orestes) [ギリシャ神話]、アキレウスとパトロクロス (Achilleus and Patroklos) [『イーリアス』]、ニーススとエウリュアロス (Nisos and Euryalos) [『アエネーイス』第9巻] などがある。cf. 拙稿「人を知る明——友情東西」『光陰』No.41.(1998年7月)。

チッキン・リトウル (Chicken Little) 「不吉な警鐘ばかり鳴らす人、声高な悲観論者」「杞憂人」。上から落ちてきたもので頭を打たれると慌てふためき、空が落下すると信ずるお伽話の登場人物名 (Henny Penny, Chicken Diddle, Chicken-Licken の名でも呼ばれる) に因む。

ディズニーランド (Disneyland) 「多彩な催しなどで多くの人々を引きつける場所」「架空の土地、お伽の国 (fantasy-land)」[1956]。1955年に米国の映画・映画製作者ウォルト・ディズニー (Walt [er] Elias] Disney, 1901-66) がロサンジェルス (Los Angeles) 近郊アナハイム (Anaheim) に開設したお馴染みの一大遊園地から。1983年に Tokyo Disneyland、1992年には Euro Disneyland (通称 Euro Disney) が開園。

テルシテス流【風】の (thersitical [θərsítikəl] <Thersit(es) + ical) 「口汚い、醜く口の悪い、毒舌の」[1650]。『イーリアス』の中のギリシャ方武将テルシテス (Thersites) の名に因む。彼は素姓卑しく、全軍中最も醜悪で口の悪い人物で、アガメムノーンやアキレウスを罵ったが、結局、後者に殺された。

テンセグリティー (tensegrity) 「各々の部材が最大限の能率で経済的に働くように引っ張り材を連続的に、圧縮材を不連続的に使用する構造体の性質」[1959]。米国の建築デザイナーで「フラードーム」(geodesic dome) ——軽量で剛性の高いドーム状の構造物 (1959) ——の開発者バックミンスター・フラー (Richard Buckminster Fuller, 1895-1983) が提唱した。彼の造語。

トム・サム (Tom Thumb) 「非常に小さい人、小さな動植物、矮小種」。米国の興行師 P.T.バーナム (Phineas Taylor Barnum, 1810-91) の創設した (1871) サーカスで活躍したストラットン (Charles Sherwood Stratton, 1838-83) の渾名 “General Tom Thumb” から。彼は身長約 77cm で、同じように小さな女性 Lavine Warren と 1863 年に結婚した。

元来“Tom Thumb”は「親指太郎」とでも言うべき親指大の小人として、古くから北欧に流布している童話の主人公である。[1579] その内容には多少の異同はあるが、Tom は Arthur 王時代の農夫の子で、牛に飲まれ、鳥にさらわれ、巨人グランボ（Giant Grunbo）に呑み込まれる。

トム・スウィフト（Tom Swift）「発明の才に優れ機智に富んだ」[形容詞]。米国の作家ストラテマイアー（Edward Stratemeyer, 1862－1930）が“Victor Appleton”のペンネームで書いた子供向けの話に登場する発明の才がある少年主人公の名前から。

ドライアズダスト（dry-as-dust or dryasdust [埃のように乾いた]）「無味乾燥で銜学臭の学者 [作家など]」／「無味乾燥な、面白みのない」[形容詞] [1872]。スコットランドの小説家・詩人スコット（Sir Walter Scott, 1771－1832）の小説の序文の幾つかで皮肉られている架空の銜学者 Dr. Jonas Dryasdust の名に因む。

トロイの木馬（Trojan Horse）「危険な贈り物」「内部から攪乱する人 [計画・謀計]」「（敵陣や閉鎖集団に入り込むための）秘策」「スパイ宣伝工作（員）」[1574]。トロイ戦争でギリシャ連合軍が敵を欺くために置いていった空洞の大きな木馬。その中にはギリシャ軍兵士が隠れていて、夜になるとそこから忍び出た彼らが城内から門を開き、味方の軍勢を引き入れて市を占領した。

[ナ 行]

ナンビー・パンビー（namby-pamby）「（政策・方針などが）確固としていない、ぐらついている」「弱々しく感傷的な、にやけた」[形容詞]／「感傷的な人、気力のない人」「涙もろさ、感傷」[1726]。1700年頃、子供のために気の抜けたような（wishy-washy）詩を幾篇か書いた英国の詩人アンブロウス・フィリップス（Ambrose Philips, 1674－1749）につけられた渾名から。フィリップスの詩を嘲笑した詩人・作曲家ヘンリー・ケアリー（Henry Carey, 1687?－1743）作の詩の題名として最初につけられた。

[ハ 行]

バイロン風（Byronic）「（特に）悲壮で感傷的で憂わしげな」[形容詞] [1823]。英国のロマン派詩人バイロン（George Gordon Byron,

Lord [6th Baron Byron], 1788–1824) の詩風や生き方の一部から。

パーキンソンの法則 (Parkinson's Law) 「仕事と時間と人員について、物理の法則めかして諧謔味豊かに述べた〈法則〉」[1955]。英国の歴史家・著述家 C.N.パーキンソン (Cyril Northcote Parkinson, 1909–93) の提出したもの。「仕事というものは割り当てられた時間一杯まで延びるものだ」、「公務員の数になすべき仕事の量や軽重と関係なく一定の割合で増加する」、「予算審議に要する時間は予算額に逆比例する」、「委員が20人以上になるとその委員会は運営不能に陥る」などの〈法則〉が人情と組織の機微にふれながら見事に説明され、数式にまでされて、高級なユーモアに読者は包まれて説得される。

バツケリズム (Butskellism) 「政敵同士が同じ政策を支持する状態」[1954]。1950年代に蔵相を務め、似たような政策を採った英国保守党指導者 R.A.バトラー (Richard Austin Butler, 1902–82) と労働党指導者 H.T.N.ケイツケル (H.T.N. Caitskell, 1906–63) の名 (Butler + Caitskell) の合成語。“Butskellite” [名詞] [形容詞] [1956] もある。

パーティントン夫人 (Dame Partington) 「歴史の進歩を食い止めようと無駄な抵抗を試みる人」[1831]。1824年大西洋岸 Sidmouth に高潮が襲った際、自宅に侵入した海水をモップで防ごうとした Mrs. Partington の名を揶揄して“Dame”なる敬称を付したものの。それ故、「ディム・パーティントン」として [タ行] に挙げるべきだったかも知れない。

この後しばらくして英国上院が、当時地主の行なっていた悪弊を若干改めようとする改革案を拒否した時、それを慨嘆した St. Paul's 会堂の参事会員シドニー・スミス (Sydney Smith, 1771–1845) が有名な演説を行ない (1831年10月、Taunton にて)、進歩を阻もうとする上院の努力の無駄を力説して、議員も多くは、あの大西洋をぞうきんで押し返そうとした Mrs. Partington と似たり寄ったりだと痛罵した。“She was excellent at a slop or a puddle, but she should never have meddled with a tempest.” 「夫人は零れ水や撥ね水は見事に拭き取ったであろうが、大嵐に手を出すべきではなかった」。この演説が広く関心と呼び、“Dame Partington” は「進歩への強力な運動に反対する者」の典型となった。

パニウルジュの羊 (mouton de Panurge) 「人の尻馬に乗る人」[附

和雷同者」「盲目的に追従する人」。ラブレーのパンタグリユエル物語『第四之書』中の有名な挿話から。船上で羊商人に侮辱されたパニユルジュが、羊を一頭買い取って海に投げ込むと、残りの羊もそれをまねて次々に後を追ひ、取り押さえようとした羊商人も海中に落ちて溺死した。

ピエリアの泉 (Pierian spring) 「(詩的) 灵感の源」[1709]。ギリシャ北東部サロニカ湾西方の沿岸地方ピーエリア (Pieria) にある、ミューズの女神たちに捧げられた泉。この水を飲む者には灵感や学識が授かるとされた。[GM]

フェル先生 (Dr. Fell) 「何とはなしに嫌われる人」。英国の諷刺作家で乱行で知られた通称 “Tom Brown” ことトマス・ブラウン (Thomas Brown, 1663—1704) の戯れ歌 “I do not love thee, Dr.Fell/The reason why I cannot tell...” から伝承童話になった。フェル先生は実在 (Dr. John Fell, 1625—86) で Oxford 大学 Christ Church 学寮長だった。

ブラーネ石 (Blarney stone) 「お世辞を上達させるもの」。アイルランドの Cork 市に近い Blarney 城の城壁の上部にある石で、これに接吻するとお世辞が巧くなると言われている。「お世辞、おべっか、甘言、おだて (cajolery)」「ごまかし、たわ言 (nonsense)」の意の “blarney” [1796] は、この城のある小村 Blarney に因む語。

ブラーブ (blurb) 「[本のカヴァー (book or dust jacket) などに刷り込まれた] 推薦広告、宣伝文句」/「…の推薦広告をする、誇大広告をする」[動詞] [1914]。米国のユーモア作家・挿し絵画家バージェス (Frank Gellet Burgess, 1866—1951) が自著の表紙に美女の絵を描いて “Miss Belinda Blurb” と名付けたことに由来する。因に、本稿筆者が、その全詩業を完訳ずみのマリアン・ムーア (Marianne Moore, 1887—1972) は1937—72年の35年間に、種々様々な書物60冊に、この「ブラーブ」を書いた。彼女の書いた最後のそれは、リルケの『ドウイノの悲歌』の英訳本である。

プロクルステスの寝台 (procrustean bed) 「無理に他を律するもの」[制度、方針、主義]、強引な画一化」[1844]。旅人を自分のベッドに寝かせ、その身長が短すぎると体をベッドの長さに合うように引き伸ばし、ベッドより長い場合は切り詰めた Procrustes (Prokrustes [プロクルステース]、[引き伸ばす男]の意。ダマステース [Damastes] の綽名) の名から。彼はテーセウス (Theseus) に殺された。[GM]

“procrustean methods”（プロクルステス手法）「一つの型に強引に嵌め込もうとする方法」。

ペネロペ（Penelope）「貞節な妻」。夫のオデュッセウス（Odysseus）がトロイ遠征で不在だった20年間、多くの求婚者を退けて貞節を守り通したペネロペ（ペーネロペイア）に由来する。ギリシャ語で“weaver”「織り手」の意。[GM]

ペネロペの織物（Penelope's web = The web of Penelope, / toile de Pénélope [仏]）「際限のない [いつまでたっても終らない] 仕事」[1581]。上記ペネロペが、布を織り上げるまではを口実にして求婚者たちを拒み通し、夜毎にその日織り上げた織り目をほどこしたことから。

ベレロフォンの手紙（Bellerophontick letter）「持参者に害となる内容を含んでいる手紙」。天馬ペーガス（Pegasus）に乗って怪物キマイラ（Chimera）を退治したコリントの勇士ベレーロポーンが、寄寓先のアルゴス王プロイトス（Proitos）からその義父であるイオバテース王（Iobates）の許へと手紙を托された。それには、妻のアンティア（Anteia）を誘惑しようとした不埒な男だから（実はその逆だった）この書状の届け手を殺してくれとあった。それに由来する。[GM]

ボズウェル（Boswell）「忠実な伝記作家」[1858]。スコットランドの弁護士・伝記作家ジェイムズ・ボズウェル（James Boswell, 1740—95）に因む。彼は1763年にジョンソン博士に初めて会ってからその死に到る1784年までの21年間に、約270日ほど会っただけだが、その間に鋭意資料収集に務めて、精密・明快・比類のないジョンソンの伝記、*The Life of Samuel Johnson*（1791）を書いた。

“boswellize”「（記事などを）ボズウェル流に細大漏らさず書く」[自 [他] 動詞] [1838]、“boswellian”「ボズウェル流の」[1843]

ポチョムキン村（Potemkin village）「不都合な事実 [状況] を覆い隠す一見堂々たる外観」[1938]。1787年、エカテリーナ二世のウクライナとクリミア訪問に際し、沿道にボール紙で見せかけの村を作らせたと伝えられる、ロシアの政治家、エカテリーナ二世（Catherine II, 1729—96）の寵臣ポチョムキン公（Prince Grigori Aleksandrovich Potëmkin, 1739—91）の名に因む。

ポリアンナ（Pollyanna）「余りにも愚かしいまでに極端な楽天家」。米国の女流小説家エリーナ・ポーター（Eleanor Porter, 1868—1920）

の小説 *Pollyanna* (1913) の、陽気で楽天的な少女の名に由来する。この作品は大好評を博して100万部以上も売れた。続篇 *Pollyanna Grows Up* (1915) がある。

ポール・プライ (Paul Pry) 「詮索好きでおせっかいな人」[1829]。英国の劇作家ジョン・プール (John Poole, 1786–1872) 作の同名喜劇 (1825) の表題人物名から。

[マ 行]

マグヌス効果 (Magnus effect) 「流体の中で回転する物体に、回転軸に直角に流れが当たるとき、流れの及ぼす力が流速と回転速度に比例する現象」[1921]。発見者であるドイツの科学者ハインリッヒ・G. マグヌス (Heinrich G. Magnus, 1802–70) の名に因む。筆者が何故このようなものをここに選んだか？ 科学ではないので〈比例〉などというわけにはゆかないが、文学作品の創作と読解に当たってのある状況、現象と思われるものの説明に、譬喩として使えそうだからである。

マクベス夫人戦法 (Lady Macbeth Strategy) 「標的にした会社を乗っ取るのに、第三者と組んで善玉・悪玉を演じながら進めてゆく計画」。シェイクスピア (William Shakespeare, 1564–1616) 作『マクベス』*Macbeth* (1606?) より。

尚、経済の領域に、一連の関連した面白い語がある。「**白い騎士**」(white knight) 「企業買収の危機にある会社などを救済するために介入する第三の企業」[1895]。(民間伝承の中で) 救助に現れる勇士 [英雄] に由来する。「**白い従者【騎士の】**」(white squire) 「企業買収攻撃をかけられた会社を防衛するために、その会社の株式を買い集める提携者の陣営」。「**黒い騎士**」(black knight) 「買収される側の企業の望まない株式公開買い付けを強行しようとする個人 [企業]」。「**灰色の騎士**」(grey knight) 「会社乗っ取りに暗躍する介入者」。どこかの国に最近、大いに話題になった〈事件〉を思い出す向きも少なくなかろう。

マジェンタ (magenta) 「フクシン (fuchsin)」[1860]。Magenta (イタリア北部、ミラノ西方のこの町で、1859年にフランス＝サルディーニア同盟軍がオーストリア軍を破った) の戦闘の年に染料の“fuchsin”が発見されたことから、この町の名が、この染料と、その色の名称になった。語義の成り立ちが面白い。「フクシン」はコールタール

からの派生物。アニリンとトルイシンの混合物を酸化して得られる緑色の小溶性固体で、水に溶かすと深紅色の液体となり、主に染料に用いられる。

マジノ線 (Maginot line) 「複雑な防禦線 [障壁]」 [1929]。第二次世界大戦前の1927-36年に対独防衛線として仏独国境に構築されたフランスの要塞線の状態から。フランスの陸軍大臣アンドレ・マジノ (André Maginot, 1877-1932) の名に因む。“Maginot-minded” 「現状を守ることに取り憑かれた [熱心な]」 「現状維持の考えに凝り固まった」 [1942]。こういう考え方が “Maginot mentality” 「(マジノ線のような) 防衛戦略に頼る心の傾向」 「時代遅れの戦略しかない人の考え方」。

マソヒズム (masochism) 「被虐性」 「精神の、肉体の、屈辱を受けることで性的満足を感じる性倒錯状態」 「虐待嗜好、嗜虐性」 「自己虐待」 「苦痛や退屈に喜びを感じる」 [1893]。被虐性を描写したオーストリアの小説家レオポルド・フォン・ザッハー＝マゾッホ (Leopold von Sacher-Masoch, 1836-95) に因む。→ 「サディズム」

ミダス (Midas) 「富豪、大金持」 「金儲けの巧みな人」 [1568]。フリギア王ミダス (英語読みでは、マイダス) は、手に触れるもの全てが黄金になる願いをディオニュース (Dionysus) に叶えてもらったが、食物や最愛の娘まで黄金になってしまうので神に謝罪して元に戻してもらった。“the Midas touch” 「どのような事業も優良企業にしてしまう [何でも金儲けをする] 能力」 [1883]。[GM]

ミトリダート法 (mithridatism) 「毒の服用量を次第に増してゆき、その毒に対する耐性を得る法」 [1851]。この方法により耐毒性を得たといわれる小アジアは黒海南岸のポントス (Pontus) の王ミトリダテス六世 (Mithridates VI, 132?-63B.C.) の名に因む。「ミトリダテス化する」 (mithridatize) 「(毒の服用量を徐々に増して) <人の> 耐毒性を高める」 [1866]。“mithridate” 「解毒剤、抗毒剤」 [1528]。

人間の、というか生物全体に大なり小なり当て嵌まりそうな適応・順応力に、改めて感じ入るしかないが、成程、毒に関しては結構ながら、これが例えば美味の場合だったらどうだろう。次第に慣れていってどれ程の美食も余り美味と感じられなくなったら？

真贋の鑑定家を養成するには終始真物のみに接しさせることが肝要だとされるが、宜なるかな。常に真物が当り前であり普通のものであり、

贗物に即座に違和感を覚えるようになった人、それが鑑定家というものなのだろう。感動とは一種の違和感であるから、となると、鑑定家とは贗物に感動する人種？

名作・名画・名品に絶えず接する人は、それらに徐々に感動しなくなる？いや、おそらくそうではあるまい。真物に接し続けることで真物に慣れっこになって感動しなくなるとしたら、その真物なるものは〈本当の〉真物ではなかったということだろう。そう考えたい。

美味にしろ、名作・名画・名品、その他如何なる領域の事物にしろ、〈本当に〉勝れた真物は、それに接する人の真物に感動する力を、一層高める筈のものだろう。そう思いたい。

「〈本当〉の真物に接すること」が、量の増加がそのものに対する敏感度を高める法であるとすれば、それは、量の増加によってそのものへの鈍感度を高める「ミトリダート法」の真反対の方法ということになる。

いずれにしろ、慣れること、適応・順応力、協調性など、望ましいばかりではない。事と次第と場合による。習うより慣れろ、と言うが、慣れたら新たにまた習い始めなければならない。ともかく、ミトリダテス六世のような人物は、毒味の役には立たない。毒味役は耐毒性のない人でなければならないのだから。

ミノタウロス (Minotaur) 「滅ぼす [破壊する] もの、破壊者」「怪物」[c1385]。クレタ島の王ミーノース (Minos) の妻パーシパエー (Pasiphaë) とクレタ島の雄牛との間に生まれた牛頭人身の怪物から。

ミュラー型擬態 (Müllerian mimicry) 「別種の生物が、捕食者の嫌う類似の外形やまずい味、毒などを持つこと」[1878]。これを著述したドイツ生まれのブラジルの生物学者フリッツ・ミュラー (Fritz Müller, 1821–97) に因む。これとは別に、「**ベイツ擬態**」(Batesian mimicry) 「嗜好性のある種 (例えばイチモンジチョウ) が、嗜好性のない種 (例えばオオカバマダラ) に外見を似せることによって捕食者から逃れるような擬態」[1861] がある。これはこれを記載した英国の博物学者ヘンリー・ウォルター・ベイツ (Henry Walter Bates, 1825–92) に因む。擬態は昆虫類にだけ見られるものではない。種々の文芸・文化現象にみられて、思い当たるものが少なくなろう。

ミュラー＝リエル錯視 (Müller-Lyer illusion) 「長さの等しい2本の直線なのに、その直線の両端にある楔形が外側を向いているか内側を

向いているかによって、2本の長さが異なるように見える錯視」[1889]。この錯覚の記載者であるドイツの社会学者フランツ＝カルル・ミュラー＝ライア（Franz-Karl Müller-Lyer, 1857－1916）の名に因む。この馴染みの有名な錯覚も示唆に富む。

メスメリズム（mesmerism）「抗し難い誘惑、魅惑」[1784]。オーストリアの医師メスメル[メスマー]（Franz or Friedrich Anton Mesmer, 1733－1815）が唱えた動物磁気（animal magnetism）による催眠術〔状態〕に由来する。彼は初めて催眠術を医療に用いた。“mesmerize”「～に催眠術をかける」「～を魅了する」[1829]。

モロク（Moloch）「恐ろしい犠牲を要求するもの」[1667]。このセム族の神を宥めるために、その礼拝で親が自分の子供を生贄にしたことに因む。旧約聖書の「レビ記」18：21、「列王記」下23：10、「エレミア記」32：35。

[ヤ 行]

ユーフェイズム（euphuism）「誇飾体」「文飾過剰文体、美辞麗句」[1592]。16世紀後半に流行した甚だ凝った技巧による装飾に富む美文体。英国の小説家・劇作家ジョン・リリー（John Lyly, 1554－1606）の二部作の小説、*Euphues, the Anatomy of Wit*『ユーフェイズ、機智の解剖』（1579）と *Euphues and his England*『ユーフェイズとその英国』（1580）とに、この意識的に洗練された文体の代表がみられることからその主人公の名に因む。この文体の文章構造の基礎は、「頭韻」（Alliteration）、「パリソン」（Parison、同じ構造の節や句を連続して用いる）、「アイソコロン」（Isocolon、長さの等しい節や句を連続させる）の三つの「釣り合い」（balance）の技巧である。Lylyの前者からの例。“Be merry but with modesty, be sober but not too sullen, be valiant and not too venturous.”「愉しくあれ、しかし慎みを忘れるな、真面目であれ、しかし余り気難しくするな、勇敢であれ、しかし余りに無謀にはなるな。」その他、「首句反復」（Anaphora）、「修辭疑問」（Rhetorical question）、「対照」（Antithesis）、長い対句、故事来歴や諺を絡ませた直喩（simile）などを特徴とする。（『英語教育事典』の大山俊一に拠る）

[ラ 行]

ライフマンシップ (lifemanship) 1. 「人生 [仕事、人間関係] に成功する [能] 力」、2. 「はったり」「相手に自分の方が偉い [上だ] と思わせる術」[1949]。英国の作家スティーブン・ポッター (Stephen Potter, 1900–69) の著作 *Some Notes on Lifemanship* (1950) で特に語義2の意味で広まった。

ラダマンテウス (Rhadamanthys) 「厳正剛直な裁判官」[1582]。ゼウス (Zeus) とエウローパ (Europa) との息子。生前正義の模範であった報いとして、死後冥界の裁判官となった。“Rhadamanthine” 「ラダマンテウスの」「厳正な」[形容詞]。[GM]

リップ・ヴァン・ウィンクル (Rip Van Winkle) 「時代遅れの人」「西洋版浦島太郎」。米国の作家・歴史家ワシントン・アーヴィング (Washington Irving, 1783–1859) 作『スケッチブック』*The Sketch Book* (1819–20) の中の同名の物語の主人公名より。キャッツキル (Catskill) 山中で20年間眠り、目が覚めてみると周囲の世界が一変していたという一種の浦島伝説が扱われている。

レイディ・バウンティフル (Lady Bountiful) 「気前のよい [慈悲深い] 婦人」「婦人慈善家」。アイルランド生まれの劇作家ジョージ・ファーカー (George Farquhar, 1678–1707) 作の風習喜劇『伊達男の策略』*The Beaux' Stratagem* (1707) の中の金満家婦人の名より。

ロウザマネー (loadsamoney) 「金の亡者」。英国のテレヴィ喜劇『金曜の夜を生で』*Friday Night Live* の登場人物名から。尚、“loadsamoney” = “loads of money” 「うなるほどの金、大金」。

ロシニョル (rossignol) 「錠前をこじ開ける道具 [鉤]」[1406]。フランス語で「ナイチンゲール、サヨナキドリ」は “rossignol” であるが、この語にある掲出の意味が、ルイ14世 (Louis XIV, 1636–1715) の極秘文書を暗号化するために作られた「ルイ14世の大暗号」(その後2世紀の間、誰にも読めなかった) を発明し暗号解読にも傑出した腕を振るったアントワヌとボナヴェントゥラのロシニョル父子 (Antoine et Bonaventura Rossignol) に因むというのは、流布説であって、実は既に200年以上以前の1406年から “rossignol” にこの意味が存在していたというこの「アナクロニズム」は甚だ面白い。別の起源を持つこの語が、ロ

シニョル父子の活躍のせいで、彼らと結びつけられるようになったものと思われる。詳しくは次の書を参照されたい。Simon Singh, *The Code Book: The Science of Secrecy from Ancient Egypt to Quantum Cryptography*, Forth Estate, 1999. 『暗号書—古代エジプトから量子暗号文に到る秘密の科学』（同書の邦訳書、青木薫訳『暗号解説』新潮社、2001）。

ローズタウン症候群 (Lordstown syndrome) 「オートメーション労働拒絶症」[1973]。オートメーション作業の単調さによる苛立ち、不安、不満などの症状のことで、米国オハイオ州 Lordstown の General Motors の工場で起きたストライキに由来する。

ロゼッタ石 (Rosetta stone) 「(問題解決・謎解きなどの) 重大な鍵、糸口となる大発見」[c1859]。1799年エジプト北東部ナイル河口の都市 Rosetta 付近で、ジュリアン要塞に駐屯中の兵士たちによって発見された石板で、紀元前196年に同一内容の碑文が、上段は聖刻〔神聖〕文字と呼ばれる古代エジプトの絵文字ヒエログリフで、中段は後にデモティックと呼ばれることになる古代エジプトの民衆文字、下段はギリシャ文字の、三種類の文字によって刻まれており、後にエジプト古代文字の解読を可能にした。この、高さ118cm、幅77cm、厚さ30cm、重さ750kg の黒色玄武岩は1802年に戦艦「レジブシェンヌ」*L'Egyptienne* に積み込まれて英国のポーツマスに送られ、同年以降、大英博物館に展示されている。ロゼッタ石の碑文を手がかりに1822年に、フランスのエジプト学者ジャン＝フランソワ・シャンポリオン (Jean-François Champollion, 1790–1832) が、エジプト象形文字の解読に成功した感銘深い物語は、次の著書に詳しい。Lesley & Roy Adkins, *The Keys of Egypt: The Race to Read the Hieroglyphs*, Harper Collins, 2000. 『エジプトの鍵—ヒエログリフ解読競争』（その邦訳、木原武一訳『ロゼッタストーン解説』新潮社、2002）

ロバの橋 (pons asinorum [pɒnz æsənɔːrəm], asses' bridge) 「初心者には難しい問題」「未経験者の能力を試す問題」[1751]。「三角形の2辺が等しければその対角も等しい」という幾何学の命題。能力の足りない人〔ロバ〕がこの証明に難儀したことから「ロバの橋」と呼ばれた。

ロルフ (Rolf) 「ロルフ式マッサージ法 (Rolfing) [1972] = [身体を柔軟にし姿勢を矯正して活力を取り戻そうという揉み療治] を用いて

マッサージする」[動詞] [1970]。この技術の考案者である米国の物理療法家アイダ・P. ロルフ (Ida P. Rolf, 1897—1979) の名に因む。名前がそれだけで動詞になったとはすごい。

＊

本稿における語彙の選択は筆者の好みによると最初に断ったが、好きな語ばかり採択したという意味ではなかった。例えば「トム・サム」は、初め表には入っていなかった。異常に小柄な人物が〈くびと〉などと称されて見世物にされるようなことはあってはなるまいと思うからである。だが、サーカスの団員は皆、特別な訓練と修業によって特殊な技芸を身につけた自らを〈見世物〉にすることで、観客を楽しませるのであり、それが彼らの仕事であり生き甲斐なのであろう。他者を楽しませられるというのは大きな美徳であり価値なのだから。それに社会内存在としての人間は誰もが大人小なり自らが見世物になり他者を見世物として生きているのではなからうか。

ストラットンも、綽名に“general”「将軍、大将」などが付加されて活躍したのだし、身の丈に合った女性と結婚もしたのだから、彼は別に不幸せではなかったであろう。それなら何も、筆者が奇妙に拘泥するのは拘泥するほうがおかしからう。というわけで採録した。それでも最終稿に到るまでには、更に二、三度出し入れを繰り返した。他の語についても全て、大なり小なり、同様の、休むに似たる下手な考えは巡らしたし、また、うっかり蘊蓄を――在る場合でも――傾けたりして「辞書」の範疇を食み出さないように心掛けはした。

筆者の言う、固有名詞の普通名詞化語彙は、その語自体に、その語を支えている固有名詞が〈深み〉を与えるから、そして、時々、色々な思いを掻き立てるから、面白いのではあるまいか。人名の場合だと、その人物が何を考えて如何に生きた人かに思いを誘われて、当方の生き方の参考にもなろうというもの。「人は自らが考えるように生きなければならない。さもないと早晩、自分が生きたように考えることになるだろう。」“Il faut vivre comme on pense, sinon tôt ou tard on finit par penser comme on a vécu.” ――Paul Bourget (1852—1935), *Le Démon de midi* 『真昼の悪魔』(1914)「エピローグ」の結びの句。この、アミアン生れの小説家・批評家ポール・ブルージェの名言が筆者の座右銘の一つに

成ってからも久しくなる。

今日もはや、女性はスポーツをする際に、あの「膝の上あるいは下にゴムを入れて絞った女性のスポーツ用のズボンの一種」である「ブルーマー」(bloomer) [1851] を使用しないであらう。だが、女性が男性と同じ服装で対等にスポーツを楽しめる時代を謳歌できるようになったのは、それを切望した米国の社会改革家・女権拡張運動指導者のブルーマー女史——「女史」なる語を筆者は全く好まないから本来は使わないのだが——のような女性が活躍したお陰なのである。「ブルーマー」は、このブルーマー (Amelia Jenks Bloomer, 1818—94) が創案したのでその名が付いた。

注

- ① 第189号の「少考」は、「小考」の誤植。
- ② この意味での文献初出年。
- ③ ギリシャ神話、の意。

本稿執筆に当たっては OED 初め下記の辞書類は改めて参照し、その中の辞句も利用させていただいた。

参照辞書 (順不同)

The Oxford English Dictionary
Webster's Third New International Dictionary
Brewer's Dictionary of Phrase and Fable
『英米故事伝説辞典』(富山房)
『ランダムハウス英和大辞典』(小学館)
『新英和大辞典』第6版(研究社)
『研究社英米文学辞典』第3版
『英語教育事典』(研究社)
『小学館ロバール仏和大辞典』
『フランス文学辞典』(東京堂出版)
『岩波哲学思想事典』